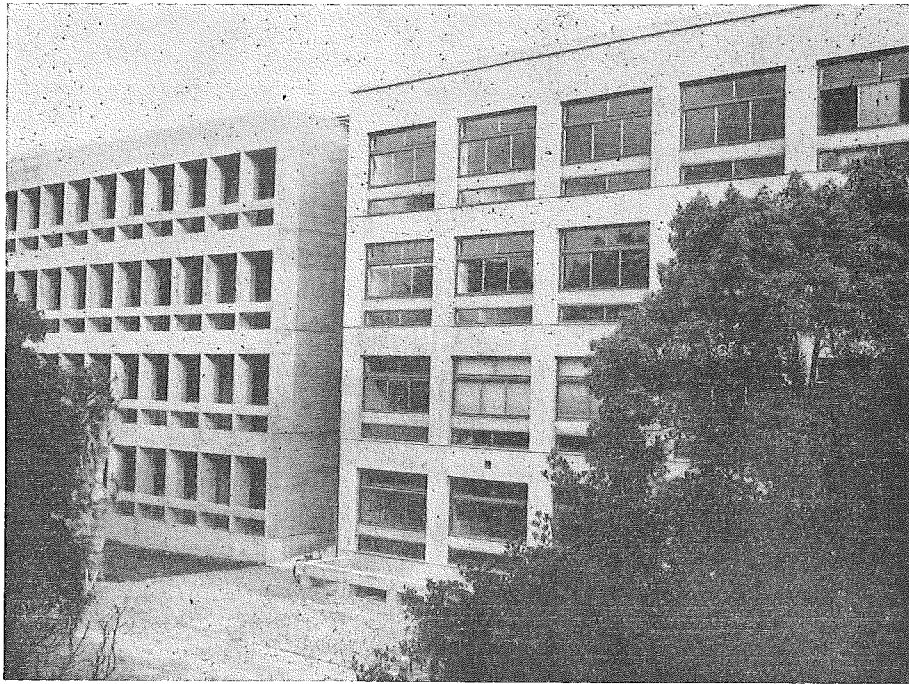


洛友會々報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛 友 会

土木新館より眺めた電気工学第二学科教室(右)と電気総合館(関電記念館)(左)



随 感

鳥 養 利 三 郎

明 る い 話

新聞の社会面は毎日、かっぱらいとか、暴力とか、收賄とか、いやな記事で埋まっている。ついこの間東京の新聞で見た一つの例であるが、生活保護を受けている七十歳の老人が、たまたまアルバイトにありつき、四千五百円ばかりのお金を手に入れて、喜びあふれながら国電に乗った。その国電の中で、若いならず者から、足を踏んだといういいがかりで脅迫を受け、とうとう千円よこすなら勘弁してやろうということになったので、しかたなく懐中から財布をとり出した、とたんにその財布ごと、あつという間に持つて行かれてしまったというのである。「人もあろうに、貧乏なこの老人のやつとこさかせいだ金をねらわなくとも……」という老人の言葉を讀んだ時、ついほろりときせられた。

このような味気ない世の中で、真心とか親切とかいうものは、凡そ縁遠いものと思われる時にでも、思いがけず、気持ちのすつとするような明るい話が聞かれることもあるものである。そういう時には暗夜に光りがさして来たような感じがする。次に述べるK氏の体験談などもその一例といつてよからう。

つい先ごろのことである。K氏は五百円札で阪急宝塚線の螢ヶ池駅で梅田までの乗車券を買った。急いでいたのでホームへ上がつてはじめて

百円分のつり銭しかもらつていないことに気づいた。すぐ引き返して出札係員にそのむね申し入れたが、あれは確かに百円札であったという。駅の上級責任者にもかけ合ったが、結局午後七時ごろに一応集計をすることになっているから、そのころ豊中駅へ来てみてくれというのである。自分にも不注意のことはあったにしろ、窓口へ出したのが五百円札であつたことは絶対の確信がある。しかし何しろ繁雑な窓口業務の事だから、黒白を明らかにすることは恐らく望むのが無理であろうと一時はあきらめて大阪へ帰ってしまった。

しかしよく考えて見ると、自分もやはり一会社の営業事務の担当者であり、いつ何時このたぐいのまちがいを、しでかさないと限らない、阪急ではどのように処置するか、後学のため見て置くのも勉強になると考えるに至った。同時にたとえ四百円というわずかの金額であろうともそれをうやむやにしてしまうような、大阪急といえども容赦は出来ないうという強気もまたわいてきた。そこで阪急梅田駅へ乗り込むことに決心した。

初めに駅員に事の次第を説明したところ、夕刻大混雑のさ中なのに、すぐ助役が柔かい丁寧な態度で迎えてくれたのには、まず少々出ばなをくじかれた。すぐ豊中へ電話してくれ。「ただ今集計中ですから暫くお待ち下さいとのことですが」間もなく「集計の結果四百円の余剰現金が出ました。当方の手落ちでしたからお返しします」と伝えて来た時には、さすが阪急だと感心した。ところが助役は「わざわざ豊中まで行っていただくのは恐縮ですから、ここで立て替え払いを致します。大へんご迷惑をかけてすみませんでした」というごあいさつなので、当方も自分の不注意をわびて辞去したのであるがこんなよい気持ちになったことは近ごろ少ない。その上この事件のために、阪急から受けた良い教訓は、私には恐らく一生忘れられまい。と談じ終ったK氏の顔ははなはだ朗らかであつた。

こんなことは、元々少し訓練の出来た職場なら、どこでも出来ることで、特に取り立て、いう程のことでもないが、この助役のような、客に行き届いた親切をする人は、当たり前のこととはいいながら、今時は少ないのではなからうか。

あまやかされすぎる

古いことばかり持ち出すのは気がひけるが、強いてこじつけるなら、温故知新という言葉もあることだから、お許しを得て昔話を二つ三つならべさせてもらうことにしよう。

昭和三年の夏、私は一月余り北支方面視察の旅に出た。往きは神戸から天津まで大阪商船を利用した。その船室は予約の前に恩師金子登博士から「中学生の息子を天津の親せきまでつれて行こうと思うが、同船室に願えないか」というお話があつた。一人旅の私には好都合なので、どう

ぞそうして下さい」と返事して置いた。さて神戸で乗船して見ると、先のパスは私と同室に用意されているが令息の分は見当らない。この船には家族用の三人部屋もあるはずで、私は三人が一室にはいるものと思像していた。先生に聞いて見ると「あれは勉強中の学生で、一人前になるまでは三等だよ」出帆後行つて見ると、いかにもこみ合った、空気もよくない三等室で、令息は元気に同室の人たち（中国人も多かつたらしい）と談笑していた。その後一週間、先生は一等、令息は三等で、同じ船の中とはいえ、別々に起居されたが、船の三等のことだから食事のほども思いやられた次第である。この天津行き船旅で、先生から無言のうちを受けた教訓は、私はいつまでもわすれることはできない。

それより少し後のことであるが、神戸製鋼所に遠藤寿一さんという重役がいた。元海軍にいた人で、住居を東京に持っていたが、自分は家族とは別に鳥羽で一人ぐらしをしておられた。そのころ私も毎月一度は同地の電機工場へ行く用があつたので懇意になつていた。氏はこどもの教育にはよく意を用いられ、とくに小さいときから訓練を加える方針を取つておられたようである。あるとき五歳と三歳の兄弟だけを汽車に乗せて、付き添いなしに東京から鳥羽まで来させたことがあつた。誘かいなどのなかつた時代ではあるが、ずいぶん思い切つた訓練であつた。

えのような訓練は昔は人造りのために至極当り前のものとされてきたようである。可愛い大切な子女の教育に

よく当てはめられたらしい。そして訓練する方と、される方の両者の間に、ピツタリした理解と信頼が成り立つていたようである。今から思うと、この私も相当にきたえこまれたようである。

私が徳島中学校に入学したのは明治三十四年、十四歳のときである。私の宅から学校までは吉野川の本支流を三つも渡つて二〇キロの道のりであつたから、入学試験にも宿屋に泊られなければならなかつた。十四歳の少年が一人で宿屋から試験場へ通つたことを今もよくおぼえている。父は宿屋を選んでくれただけで、学校へも宿へも来てくれなかつた。同じ小学校からの受験生はほかにはなく、まったくの一人ばつちであつたが、一人で行けないくらいなら入学

を止めろといわれた。いまから思うと、何事でも自分でやつて行こうという気位と、親の信頼に対する責任感とが支えになつていたのである。このようにして育つてきた者たちと比べると、今の学生は恵まれたものだと思ふ。入学さえしてくれれば、親はどんなことでもいう通りにしろという。大学の入学試験にさえ付き添う親の群で構内が埋まるらしい。そして入学しようものなら、ごきげん取り人気取りの教授も少なくないという。これではあまやかされすぎではないか。あまやかされるとバカになる。そのためか、何だか思ひ上つていふような、また間が抜けていふような風に見えるが、一人で行けないくらいなら入学

在米雑感

藤文治

昨年三月十日から今年三月十八日まで一年とちよつとの間、文部省在外研究員として、コロンビア大学（ニューヨーク・私学）に約九ヶ月、カリフォルニア大学（パークレー・州立）に二ヶ月間在籍し、その間一ヶ月余欧州を廻り、専門の自動制御の勉強を致して参りました。

最新の商品であるこの大衆食堂も今日では集つていふのは大部分が老

人である。それに例へばニューヨークの市中などでは、田舎から来たお上りりさんとおぼしき人達がチラホラいる。活き活きとした若い人達あるいは中年層の人々からは見離された存在になつていふ理由としてあるアメリカ人はこう答えた。「一、チップが要らない（それだけ節約できる）、ムードがない（若い人には堪えられない）、それでも結構繁昌している。しかし、老人達が追出されることがないままに、恰好の溜り場として、ヒソソリと食事を話し合つていふ姿には、心なしか悲哀の念を禁じえなかつた。これは私の感傷のせいだろうか。

ところが一昨年の秋、ニューヨークにこれとは全く違つたものが同じオートマツトなる名の下に現れた。場所はニューヨークのセントラである。タイムズスクエアの地下鉄である。正体は無人地下鉄、と云つても人を乗せない地下鉄ではなく、運転手も車掌もない無人自動運転の地下鉄である。タイムズスクエアとグランドセントラルの間約一キロメートルの間を往復ピストン運転を行つていふ。途中の停車駅もなく地下鉄であるから勿論交又するトラフィックもないので、無人化するには最も条件のよい対象である。しかし、最も困難視されているもの一つである電車運転を試験的にせよ無人化し、現に日夜数千いや何万という人が運ばれている。私の夢はこの新しいオートマツトの出現を中心として果しなく

キューバ問題

昨年十月二十二日の夜、ケネディ大統領がキューバに対する武力封鎖を宣言、明けて翌二十三日ニューヨークは騒然たる空気に包まれてしまつた。翌朝のニューヨークタイムスは全段抜きでこれを報道し、新聞という新聞は飛ぶような売れ行きで、平常楽天的なアメリカ人もさすがに笑顔も見せず、寧ろ悲愴な顔付きをしていました。私もフト昭和十六年十二月八日日本が第二次世界大戦に突入したあの日の感激というよりは寧ろ悲愴な気持を思い出したほどです。そう云えばニューヨークタイムスが全段抜きで報道したのは、日本軍の真珠湾攻撃以来のことだと、か、こうした全段抜きの報道は約一週間位つづいた点から見て、アメリカに取つてどれ程のビッグニュースであつたかが伺えると思ひます。二十三日火曜日コロンビア大学にいつものように登校すると、教官連中もホータブルラゾオを持歩き、昼食の時間にも賑に討議してました。その二、三を紹介しますと、「こんどの封鎖は近づく選挙に対するデユスチャで、トコトンまで行くことはないだろう。しかしデユスチャにしては強すぎる、見せかけにせよこうした強い態度は戦争発生危険性を増大するのに役立つだけだ。結局皆の意見は一応、絶対に戦争にはならないだろう」という点では一致していましたが、それは確信と云うよりは寧ろ願望という方が正しかつたと思ひます。しかし一般大衆の声は

たつた次第です。

接する範囲が限定されているせいもあつてはつきりは判りませんでした。下宿の家主などを通じて聞いた声は、ケネディの決意に拍手しているようでした。戦争の悲惨さを身をもって体験していない国民としては、あるいは仕方のないことかも知れませんが、それだけに空恐しい感じがしたのは、異郷の空で危機を迎えた特殊な環境のせいとも云い切れないと思います。

こうした騒然たる時、愈々明日ミサイルを積んだロシアの船とアメリカ艦隊が出合うという誠に物騒なとき、洛友会報に簡単な報告をのせましたように、たまたまニューヨークに來られた松田先生を聞い、在ニューヨーク洛友会会員が集つたのでした。正直なところ酒は汲めども一向に意気は上らず、折からの冷たい雨は、われわれの心を暗くするばかりでした。思えばゾツとする毎日でした。

差別問題

アメリカの最大の弱点である黒人問題としては、私がアメリカについて間もなくミシシッピ大学的事件があり、最近では又々バーミングハムやトスカルーサなどで同様の問題が発生し新聞紙上を賑わしたことは御承知の通りです。昨年来ニューヨークからサフランシスコまで、今から思えば私にとつては無謀と思われような、その日まかせの無計画大陸横断バス旅行を十四日間行い、その途上前記の都市を順次通過致しましたが、その町の種々の思い出をだぐつて見ても黒人問題に關連する

色々なものがあつて、思い出しませんが、いまだにバスの礼合室が白人と黒人とで別々であつたり、黒人歓迎と云う大きなホテルの看板がハイウェイの道端に建ててあるのにも屢々ぶつかりました。また南部の人はいまだに南北戦争を怨に思っているの、南部諸州のプレートトナパンバをつけた自動車は、一寸でも交通違反をするとたちどころにチケット（罰金通告書）を買うそうで、黒人問題の根強さを物語つています。

問題の少いと云われている、北部たとえばニューヨークでも色々問題があります。マンハッタン北部にあるハーレム地区は、黒人が集团的に住居している貧民街で、この地区に少し入つてみましたが、一種異様な雰囲気、激んだ重圧感が神経を異常なまでに緊張させるのでした。この地区は御多聞に洩れず犯罪の温床ともなつてをり、白人はこれを白眼視しています。現在ニューヨーク市当局はこの地区の古いビルをこわし、日本の団地に似た住宅区に改造するため二十階程度のビル（アパートメント）を盛んに建造し、その間に芝生を植込むなど浄化に懸命の努力を払つています。このアパートの入居資格は年間収入が五千ドルとか四千ドル以下ということで、わが国とは以下と以上が逆になっています。

フォルニヤ大学のハウジング・オフィスでも、黒人学生・アジア人学生・白人学生をオトリにして、学生下宿を申込んだ家に趣かせ、家主の云う下宿料を他の条件が黒人・白人などで異なるかどうかを調査したり、また申込み者に差別待遇をしないことを誓約させたりして差別撤廃に懸命な努力をしています。

差別撤廃の運動は良識ある人々の間に辛棒強く展開され、一日一日と改善されつつありますが、皮膚の色の違いによる本能的な嫌悪の情に、理由なき白人優越感と、黒人のレベルの低さ並びにそれを改善しようとする意志の欠如とがからみ合つて、云わば泥沼に足を入れた恰好で、黒人問題と同じく本能的（宗教的）な原因に關係するユダヤ人問題とは、アメリカ人に課せられた宿命的な課題だと云えるでせう。

工科系学生の減少

アメリカ労働局の発表によれば一九六〇年から一九七〇年までの十一年間に、技術者、化学者の数を、一九六〇年のそれに比して約一・八倍になる予定だと予測を建てておりますが、最近における大学生の志望科別入学生数の増減を調べると、このようになつています。毎年高校から大学へ進学する学生数は十三万増加していますが、工学部、医学部（歯科を含む）、法学部などでは毎年逆に五万減少し、進学生数の増加を考慮すると差引き十八万減少しつづつております。このままでは前記の一・八倍の予測は到底達成できない現状にあり、政府や学校関係者の頭痛の種

になつてゐます。工学部（学生数減少の理由はこうです。工学部での教育は他学部と較べ非常に過重で、学生のジボラれることは日本の学生の比ではありませんが、これを嫌うことが一つの理由です。つぎに大学を卒業し入社する時、工科系の学生の初任給は、成程他学部のそれに比して幾分高いのですが、入社後の伸びが悪く、仕事も能率一点張り、エンヂニアの仕事はその他の職種に比べて苦勞が多い割に、将来の昇進がよくない、これが第二の理由です。その他理由はいくらかあります。エンヂニアでなくとも、楽に生活しかつエンヂョイするに足る収入がえられない、曰くエンヂニアには生活をエンツョイする時間が少い曰く……

しかしこれは裏がえして見れば、現在第一線に働いている技術者科学者がどんな生活をしているか、どんな気魂で仕事をしているかを物語つている訳で、われわれの見習うべきものを多く持つているのは云うまでもありません。どちらかと云えば日本ではエンヂニアは結構な仕事だと云えば云い過ぎになるでせうか。

オートメーションと労働問題

アメリカ労働局の発表によれば、昨年度の雇用数はアメリカ史上空前の増加を示したようですが、その半面、解雇数も空前だつたようで差引すると多少失業者が増加したと云つています。これはオートメーションの推進が大きな原因だと指摘してました。一方労働組合の関係者も旺んにこの問題を討議し、ラジオその

他でも公開討論会形式のプログラムを組むなど旺んに啓蒙を行つていました。わが国ではもう数年前に論議された問題で、その結論も似たようなもので、オートメーションはせき止めることのできない大きな流れであり、それによる労働者の犠牲をなくするため、政府あるいは会社は配置転換を目的とする労働者の再教育に努力すべきである云うのが、経営者並びに労働組合の共通した見解のようです。

聞くところによれば、従来会社と組合との間の協約により、オートメーションにより余剰労働者を生じてもこれを解雇しないことが保証されていたそう、ある鉄鋼会社では、老齢の労働者に半ば強制的（？）に3ヶ月の有給休暇を与えるなど苦肉の策を取つたところも最近あるようです。（アメリカでは一般には解雇される場合は同じ条件なら若い人が先で年長者が後になるようになっております。勿論給料は職務給本位ですから勤務年限にはあまり関係なく、仕事の内容によつて定まります。）しかしこのような方策もそろそろ限界に達しつづつあり、あちこちで問題を起しつづつある。

とも思いますが、敢えて私の聞いたまま見たままを思い切つて書いて見た次第です。

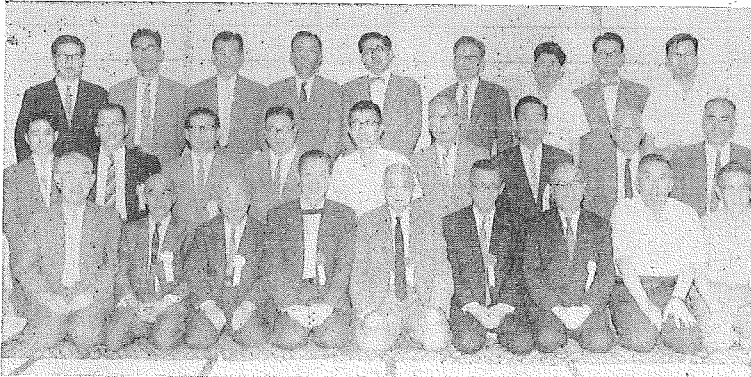
(京都大学工学部教授、電子工学科)

洛友会四国支部総会記事

六月二十九日、本部より羽村先生、大谷先生、山村幹事をお迎えし、高松市内新常盤にて第八回四国支部総会を開催した。

・渡部支部長の挨拶に始まり、徳岡幹事から昭和三十七年度会務並びに会計報告を行ない満場一の承認を得た。次いで大谷先生、羽村先生、山村幹事から教室および本部の近況が伝えられた。最後に支部役員の見任に移り次の諸氏が新役員として選出された。

支部長 渡部兼雄
副支部長 宮地冬樹
北脇保彦



洛友会中国支部 総会記事

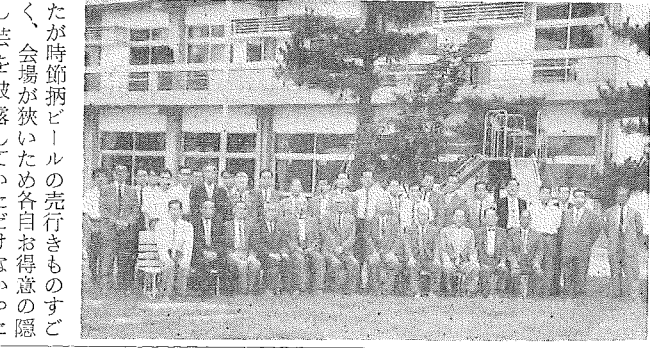
七月六日、日本三景の一つ宮島の大鳥居を対岸に見る中国電力健保宮島荘に於いて林(重)先生、山村本部幹事をお迎えして三十八年度総会を開催した。今回は開催地が観光地であり、宿泊設備も整つているため遠方よりの出席者も多く盛大に行なうことができた。

総会は真田支部長の挨拶にはじまり、業務、会計報告の後、三十八年度役員の変更を行ない全員の賛同を得て全部留任が決定された。次に林先生、山村幹事の近況報告を承り、教室の目覚しい発展に意を強くした次第である。

ついで当支部ニュースの紹介があつて、故人となられた鈴木貫一(明四二)中村常蔵(講大一一四)両氏の冥福を祈つて黙禱を捧げ、また第十二回電力賞を受賞された真田(夫)氏にその偉業をたたえて「...」を贈つた。総会議事を終つて宴会に入つ



幹事 平井滋二 原田尚文
藤原泰彦 片岡恒



たが時節柄ビールの売行きもすごく、会場が狭いため各自お得意の隠し芸を披露していただかなかつた。

(梶谷記)

深谷運俊
なお、新入会員として近藤敬治氏(住友共電)を迎えた。

つづいて懇親会に入り、和気あいあいの歓談中には歌などもとび出して皆んな愉快な一刻を過した。(徳岡記)

在京甲子会懇親会

大正十三年は甲子(かのえね)の年に当たりますから大正十三年組は甲子会と名づけております。最近日立市から東京本社へ栄転されました三浦君を加えて在京会員は十名となりました。今年には三十九周年であります。三浦君歓迎やら、来年の四十周年の記念会に全国から会員を東京に誘致する下相談やらを兼ねて、去る七月二日(火)夕八芳園で懇親会を開きました。会員十名の内九名来会という好出席率でありました。中には三十九年ぶりの再会の人もあり、互に学生時代やその後の近況などの話に花が咲き八芳園差回しの芸能あり、歓を尽して九時半散会しました。(菊地・田中)

島津洛友会例会

六月十三日、清野先生、大谷先生をお迎えして、梅雨遅る東山山麓栗田荘で、島津洛友会例会を開催した。

会員十九名(うち三名欠席)。例年新入会員の歓迎会となるべきところ、今回は残念ながら新入なし。中堀氏の弊社取締役就任のお祝を兼ねた。宴始まるに及んで突如停電。ロソクの下、先生を囲んで談論風発、雅趣横溢の盛会であつた。(岡崎敬記)

関野弥三氏を悼む

かねて療養につとめておられた推薦会員関野弥三氏は薬石効なく、ついに七月十三日、八十九歳の高齢をもつて長逝されました。同十五日には無学寺において、その生い立ちより世話されま電気講習所の卒業生によつて、いともしめやかに講習所葬が営まれました。

氏は東京物理学校卒業と共にわが電気教室に奉職せられそれ以来助手、講師として四十年間勤続され、その間懇話会名簿を作成し、今日の洛友会の基礎を作られたのであります。

茲に謹んで哀悼の意を表し、御冥福をお祈りいたします。